

産経新聞

「いちばん最後に投入されたものが、とかく、すべてを決定したように思われがちなのである」

これは『ローマ建国史』を書いたティトゥス・リウィウスの

歴史の交差点

武蔵野大特任教授 山内昌之



言葉である。最近の公明党・山口那津男代表が1人10万円の現金給付を認めさせた手際の良さを見るにつけて、リウィウスの言葉をつい思い出してしまふ。一世帯あたり30万円の給付と

10万円給付は全都道府県での緊急事態宣言と結びつけて正当化されるよつた。もともと10万円と30万円のいずれをとるか、首相その人にも選択の余地が残されていたとも聞く。財務省はじめ政府の合理的思考から

一律10万円給付の攻防

導かれた30万円の難点は、受け取れる国民の数が限られており時間もかかることであつた。

自民党や公明党には政府与党として新型コロナウイルス感染症危機に直面した市民、特に個人事業主や低所得者を早期に救済する義務

10万円給付をめぐる2人のやりとりと首相の決断は、最後の瞬間に政局の主導権を別の政治家から取り戻す結果ともなつたのではないか。それは都民への休業支援約束で、政府以上にアピールしていた小池百合子東京都知事存在感を薄める効果をひとまず生み出した。全国レベルで本格的な政策実行力を示せるのは政府与党以外にない。

山内氏は、一日足らずの凝縮された政治の時間帯で成果を得たと見るや、首相の「大きな決断」をさりげなくたたえ、財務省の新補正予算作成の労苦への「いたわり」を表現する演技力を見せた。ここで山口氏の出番はひとまず終わったのである。

16世紀フランスの哲学者、モンテーニュは「名譽以外のものなら、すべてのやりとりができて」と述べた。安倍首相が10万円給付の提案を安易に受け入れ

(やまうち まさゆき)